

我が国における「酪農教育ファーム」の成立とその教育的意義

羽豆 成二

Formation of “Dairy Farms for Schools” and its Educational Significance in Japan

Seiji HAZU

【要約】

「教育ファーム」というコンセプトが生まれたのは、20世紀半ばのアメリカとヨーロッパであった。その発端となったのは、第二次世界対戦直後のアメリカであった。戦争によってすさんでしまった子どもたちの荒れた心を、動物たちと触れ合うことを通して和らげようとするところから始まったものである。

本論は、こうした経緯を踏まえ、1998（平成10）年7月、我が国において、酪農と教育の一体化を図り酪農体験を通して子どもたちに「食の教育」「いのちの教育」「心の教育」を学ばせ、支援することを主な目的として設立された「酪農教育ファーム推進委員会」の活動を中心として、我が国における「酪農教育ファーム」の成立とその教育的意義について論述するものである。

【Summary】

A concept, “Farms for Schools” was born in U.S.A. and Europe in the middle of the 20th century. It started just after World War II in U.S.A. They thought it could calm the children’s heart through contact with animals. They had hardened and been in confusion by war.

In this paper I will talk mainly about the activities of “Committee of Dairy Farms for Schools” and significance of formation of Dairy Farming and Education on the basis of such a process. In our country it was founded in July in 1998.

They tried to unificate dairy farming and education and promote “education of appetite”, “education of life” and “education of mental healthcare” for children.

I はじめに

——最近の我が国の学校教育をめぐる諸問題——

(1) 生徒指導上の問題

2005（平成17）年9月23日付け国内朝刊各紙には、生徒指導にかかわって極めてショッキングな見出しの記事が掲載された。例えば、当日の朝日新聞では、次のような見出しであった。^①

公立小の校内暴力 先生相手急増 04年度 3割増え336件

その掲載内容の要旨は、以下のようであった。

全国の公立小学生が04年度に学校内で起こした暴力行為は1890件で前年度比で18%増になっていることがわかった。
--

このうち、子ども同士や器物損壊の校内暴力は10%台の増加だったのに対し、教師に対する暴力は336件の過去最多で、前年度の253件から33%増となった。

中高生の校内暴力は減少し、沈静化の傾向が見えるのに小学生の校内暴力には歯止めがかかっていない。

こうした記事を待つまでもなく、現在、少年非行は戦後「第四の波」にあると言われ、深刻な状況に直面している。^②

少年による主要刑法犯の検挙人員の推移を基にすると、昭和26年、39年、58年をそれぞれのピークとする三つの波があり、昭和59年以降は減少していたものが平成8年以降増加の傾向にあり、現在では、第四の波とも言われている。

とりわけ、昨年2004（平成16）年6月、長崎県佐世保市で起こった校内における小学校6年生女児による同級生殺傷事件は、当時大きな社会問題としても取り上げられ、子どもや学校、保護者等に大きな衝撃を与えることになった。

2005（平成17）年には、高校生による自分の両親の殺人、学校内で、また、授業中に同級生に対してナイフを使っただけの殺傷事件が続いて発生した。

こうした動きが見られる中で、最近、小・中学校では、「新しい荒れ」という現象が見られるようになってきている。この新しい荒れに共通する特徴としては、通常はごく「普通の子」と言われている子が、ある日、突然に思いもよらないような残酷な行為をしたり、他者に迷惑をかけたりするような行為をするものであって、「ムカツク」とか「キレル」という言葉に代表される凶暴性を発揮し、ときに暴力行為や殺人行為を起こしたりするものである。

一方で、小学校においては、いまだ「学級崩壊」という現象が見られ、いまなお解消されてはいない。学級崩壊とは、授業中、教師の言うことを聞かないばかりか、教室を立ち歩いたりふざけたり、教師に暴言をはいたりするなどして授業を妨害する行為である。つまり、学級集団としてのまとまりが維持できなくなるのである。こうした行為が高学年だけではなく、1、2年生の低学年の教室においても、日常的に見られるようになってきているのである。

なぜこうした行動が見られるようになってきたのか、その背景や原因を明確にすることは容易なことではない。しかし、子どものこうした行為を生み出す背景には、学校や家庭、地域社会など、子どもを取り巻く環境的な条件が大きく影響していることは事実であり、このまま放置しておくことはできない大きな問題である。

こうしてみても、小・中・高校生を中心として子どもたちをめぐる生徒指導（生活指導）上の問題は、複雑な要因を抱えているが、一日も早くその解決が図られなければならない問題であり、現在の学校教育が抱える大きな課題の一つとなっている。

(2) 学力向上をめぐる問題

また、一方では、2004（平成16）年12月に相続いて

公表された二つの国際学力調査の結果から、「学力向上」が一段と大きく叫ばれるようになってきた。つまり、その一つは、経済協力開発機構（OECD）が実施した「生徒の学習到達度調査」（PISA2003）であり、もう一つは、国際教育到達度評価学会（IEA）による「国際数学・理科教育動向調査」（TIMSS2003）の調査結果である。

この二つの国際学力調査の結果からも、我が国の児童・生徒の学力低下が指摘され、現在、小・中・高等学校を通じて、「学力向上」が大きく叫ばれ、各学校においては、国語、算数、数学、理科などを中心として、その向上を目指した教育活動が積極的に推進されている。

しかし、こうした動きは、その一方で、保護者などにも学力向上の風潮をあおることとなり、子どもたちの通塾などの増加を高めるものにもなっている。このことが起因し、子どもの進学に際して、私立校等への指向を強くしたり、学力の高低による学校選択に拍車をかけたりするものにもなっている。また、子どもや教師のストレスを高める主要な要因の一つにもなっている。

(3) 教師のバーンアウト

ところで、最近では、学校における教師を巡る新たな問題として、教師の「バーンアウト（Burned-out）」にかかわる問題が社会問題化してきている。^③

バーンアウトとは、ある日突然、今まで生き生きと働いていた人が、職場に行くのが嫌になったり、人とのかわりが煩わしくなったりするような症状のことである。一般に、こうした症状のことを「焼き切れ症状」とも言われている。

特に、大都市を中心に、新規採用教師などに、こうした症状が多く見られ、採用後1年もたずに辞任していく教師が増えてきているという実態が浮き彫りにされてきている。

教師がバーンアウトしやすい職場環境としては、校内における子どもの生徒指導上の困難さや保護者との対応問題などで、教師がこれまでと比べて、より一層忙しくなっている実態が見られる。つまり、職場全体が、一段と職務多忙となってきたことが指摘できるのである。

また、コンピュータ導入などにより、職場における教職員相互のコミュニケーションが減り、相互の人間関係が希薄化されてきており、教職員一人ひとりのストレスが高まっていることも、バーンアウトしやすい要因の一つとしてあげられる。

以上、ここでは、現在の学校教育をめぐる諸問題として、子どもの生徒指導上の問題、学力向上をめぐる問題、教師のバーンアウトにかかわる問題の三つを、大きく取り上げた。これらの三つは、現在の子ども、教師、学校にかかわる問題であり、早急に何らかの具体的な対応を必要とするものであり、放置しておくことができない重要な問題でもある。

そこで、これからの学校教育は、学校や家庭、地域社会などの強い連携のもとに子どもの健やかな成長を促すことを大切にされた教育活動を推進することが一層重視されなければならない。

Ⅱ 我が国における「酪農教育ファーム」の成立

(1) 酪農教育ファームとは

酪農教育ファームとは、酪農体験を通して、子どもたちの「食」と「いのち」と「心」の学びを支援することを主な目的とするものである。

このことを、定義づけるならば、「酪農や農業、自然環境、自然との共存関係を学ぶことができる牧場や農場。」と表すことができる。その目指す主な活動としては、以下の三つをあげることができる。⁴⁾

- ① 牧場や農場を教育の場として開放し、酪農や農業の持つ多面的機能や公益的役割、環境保全や循環型農業生産について、理解を得るように働きか

ける。

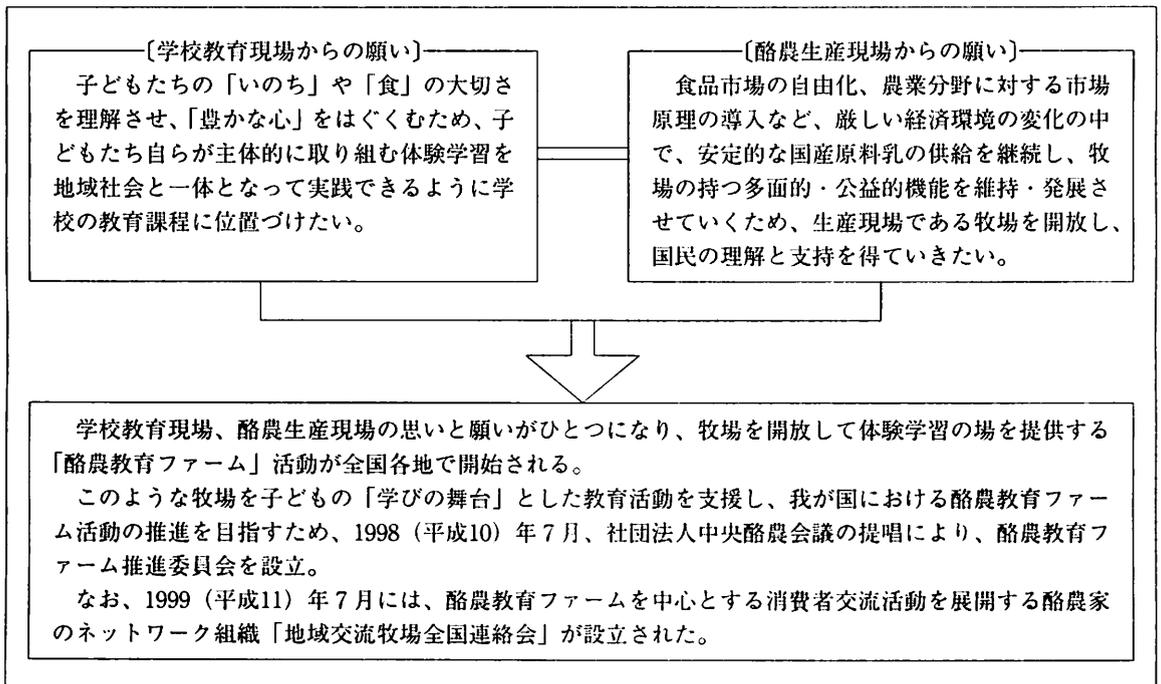
- ② 生命産業である酪農の特性を生かし、地域や学校との連携を進めながら、子どもたちの「心の教育」や「いのちの教育」を支援する。
- ③ 生乳を生産する酪農家の努力や工夫、自然との共存や家畜や動物の生態、我が国の食生活における牛乳や乳製品の優れた役割など、確かな情報や知識を広めていく。

つまり、酪農教育ファームとは、教育と酪農、農業などとの一体化を図ろうとするものであり、子どもたちの「生きる力」の育成を強く支援しようとするものである。現在、フランスやイギリスなど、ヨーロッパでは多く見られるものであり、多くの成果をあげていることが報告されている。⁵⁾

(2) 酪農教育ファーム推進委員会の発足

1998（平成10）年7月、我が国における「酪農教育ファーム」活動を推進していく母体として「酪農教育ファーム推進委員会」（以下、推進委員会）が設立された。

こうして、推進委員会は、社団法人中央酪農会議の提唱によって、主として学校教育現場と酪農生産現場からの熱い思いと願いにより、関係諸機関の協力を得て設立されたものであり、この関係を図示すると以下のように表される。



(3) 推進委員会の活動

本推進委員会は、学校教育関係者、酪農生産関係者の強い連携と協力の下に、以下の五つの目的を設定しその実現に向けて活動を継続している。⁶⁹⁾

① 酪農の多面的・公益的役割の追究

第一次産業としての酪農の役割とともに、酪農生産現場としての牧場及び酪農の立地する農村の自然景観や生活文化を通して、環境保全やリサイクル型農業生産などの社会的テーマをも視野に含め、農業・酪農の持つ多面的・公益的役割について明確にする。

② 酪農の特性を生かし、「生きる力」の育成

「生命産業」とも言われている酪農の産業としての特性を生かし、子ども一人ひとりの生きる力をはぐくむために、「心の教育」「いのちの教育」の実践を支援するとともに、生産者自身への啓蒙を図る。

③ 酪農にかかわる生きた情報の普及・啓発

原料乳を生産・供給する酪農生産の工夫や努力、地域産業との結びつき、自然との共存の仕組みや牧場の動物たちの生態、さらに我が国の食生活における牛乳や乳製品の優れた役割などについて、より確かで、詳しい情報や知識を学校教育や学校教育の場を通して普及・啓発していく。

④ 教育の場にふさわしい牧場としての整備

酪農生産現場としての牧場を、上記の目的に即した「教育の場」としてふさわしい機能や環境を備えた酪農教育ファームとして整備するとともに、生産者に対して、指導者としてふさわしい指導・援助ができるようにする。

⑤ 教育プログラムやツールの開発

上記の活動を円滑に推進していくために「酪農教育ファーム認証制度」を創設・運営するとともに、教育現場、酪農生産現場にふさわしいシステムや教育プログラムの浸透及び教育現場酪農生産現場にふさわしい教育ツールの開発を図る。

つまり、本推進委員会の主たる活動としては、酪農の多面的・公益的役割を明確にするとともに、酪農にかかわる生きた情報の普及と啓発活動を重視しながら酪農の持つ特性を生かすなどして、21世紀を生きぬく子どもたちの真の「生きる力」の育成に貢献しようとするものである。

こうした活動は、教育と酪農の持つ特性を一体化するものであり、我が国の学校教育にとっても、酪農の発展にとっても意義あるものとなる。

特に、コンピュータの一層の普及とともに、本物と

の触れ合いの機会がなく、バーチャルの世界に没入がちになるこれからの子どもたちの健全育成にとって、極めて価値あるものとなる。

(4) 酪農教育ファームの認証

これまで、国内各地においては、一部の篤志農家や情熱をもつ酪農家が、近隣の子どもたちに農業体験や酪農体験などの場として、農場や牧場を開放していたケースは個々には見られた。しかし、ここには体系だった組織もネットワークもなく、子どもの安全や衛生、医療などの面でも不安材料を多く抱えていたことは事実である。

そこで、本推進委員会では、酪農教育ファームでの活動の推進に当たって、利用者が安心して利用できるとともに、酪農教育ファームを安定的・長期的に発展させ、地域社会や住民の信頼や期待に十分にこたえられるようにするために、2001（平成13）年1月、「酪農教育ファーム認証制度」を創設した。⁷⁰⁾

この制度は、安全や衛生管理、教育能力など、一定の水準に達した牧場に対して「教育を行うのに適した牧場である」という認証するものである。被認証者としては、以下の牧場や農場としている。

① 酪農家

② 乳牛を飼育する公共育成牧場、畜産試験場、個人育成牧場、観光牧場・農場

③ 乳牛や家畜を飼養する教育的施設・農場

④ 上記に準じる牧場、農場、施設、機関、個人で、本委員会が認めた者

また、認証の条件としては、何よりも酪農教育ファームの教育活動の目的を理解し、情熱をもって子どもたちを受け入れることのできる牧場や農場であることを第一にしている。そして、利用者が安心して利用できることができるように、次の安全・衛生条件を満たしている牧場や農場を酪農教育ファームとして認証している。

① 受け入れ時に、訪問者のトイレ・手洗い場を確保できる。

② 緊急医療品を一式備えている。

③ 病院等、連絡が取れる医療機関がある。

④ 訪問者を対象とした適切な保険に加入している。

⑤ 法律に定められた安全・衛生管理基準を遵守する。

さらに、認証された牧場や農場は、認証後も、次の規則を守ることを義務づけている。

① 訪問者の指導や学習には、原則として本委員会が主催する認証研修会を受講した牧場主または牧

場経営に参画している牧場主の家族、あるいは牧場主と同等の知識と情熱を有するスタッフが当たる。

- ② 本委員会が提供する認証看板を常に掲示する。
- ③ 本委員会が実施する調査に対して協力する。
- ④ 本委員会が定める事項について、十分に留意する。

こうしたきびしい認証条件の下に、現在、本委員会より、酪農教育ファームとして認証されている牧場は平成16年度現在で、183牧場となっている。本委員会としても、こうした認証牧場・農場を増やすことが当面する重要課題の一つである。

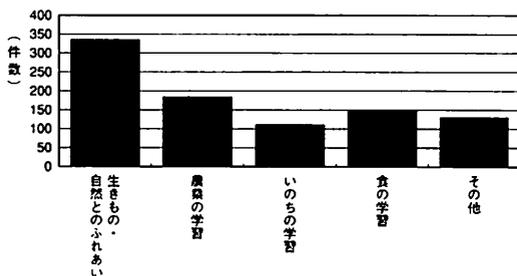
(5) 酪農教育ファームの利用実態⁽⁴⁾

19988（平成10）年より、本格的に活動した我が国の酪農教育ファームの利用実態は、以下のようになっている。——2003（平成15）年現在——⁽⁴⁾

① 平成15年度受け入れ実態

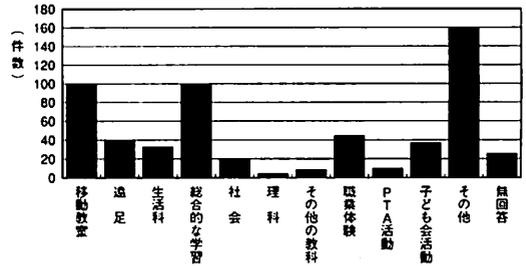
調査項目	回答数
訪問団体数	6,424件
訪問者総数	225,401人
1回当たり平均訪問者数	35人
牧場当たり平均受入団体数	43件
牧場当たりの平均受入人数	1,512人

② 訪問目的



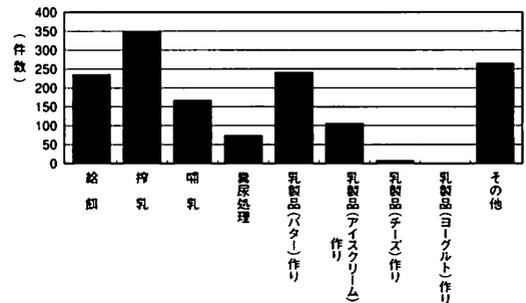
生きものや自然とのふれあいが最も多く、次いで、農業の学習、そして、食やいのちの学習と続く。

③ 訪問形態



移動教室や総合的な学習の時間での訪問が約200件、その他が約160件を占めている。その他は、修学旅行や先生の研修会、園外保育、学童の体験会、ファームスティ、個人や家族連れの訪問など。

④ 体験内容



搾乳が全体の約1/4、給餌、バター作り体験が多くなっている。その他の活動も件数が多く、これは農作業体験や小動物とのふれあいなど、牧場独自の取り組みを行うケースが増えている。

Ⅲ 酪農教育ファームの教育的意義

酪農教育ファームで行われる学習としては、「ファームの見学」、「ファームでの農作業（酪農）体験」「乳製品づくり体験」、「テーマ学習」などの四つの活動が実践できる。

ここでは、こうした学習を通して、酪農教育ファームに期待できる教育的な意義として、以下の五つを取り上げる。⁽⁶⁾

(1) 感動体験の味わい

酪農教育ファームは、酪農と教育とを一体化させ、食、いのち、心の教育の実現を目指すものである。それは、牧場や農場などを学びの場として、子どもたちのための体験学習を何よりも重視する。

言うまでもなく酪農は、牛乳をはじめとして、バターやチーズ、アイスクリームなどの乳製品を中心とし

た食料生産を担っている。こうして酪農は、子どもたちが、日々、学校給食や家庭で飲む牛乳をはじめバターやチーズなどを生産し、子どもたちの日常生活とも極めてかかわりの大きいものである。

特に、乳牛を飼う牧場を中心として展開される酪農教育は、子どもたちにとってみれば生きた乳牛に直接触れたり、餌をやったり、牛舎の清掃をしたり、乳搾りをしたりする体験ができる。また、広い牧場や農場で過ごすことにより、多様な草木や多種類の生き物とかかわり、見たり、探したり触れたりする多様な活動に熱中することが可能となる。

こうした生き物や本物に直接ふれ合う多様な体験活動を通して、子どもたちは酪農の仕事の厳しさや喜び楽しさなどを実感できるようになる。このことは、教室での座学では絶対に経験することのできない貴重な感動体験となる。この感動体験は、子どものみずみずしい感性を高めることになり、子どもの人格を豊かなものとする。

(2) 生命の尊さの実感

子どもたちは、自分の手で牛の乳房に触り、乳搾りを体験することにより、生乳の温かさを実感できる。また、乳牛の背中をブラッシングし気持ちよさそうに喜ぶ乳牛の仕種を見たり、乳牛のかわいい目をじっと見つめたりすることにより、生き物への愛情を感じることができるようになる。

時には、子牛の出産場面に立ち会うこともでき、生命の尊さを体全身で感じることができ。特に、最近の子どもたちの行動傾向として、絶えずイライラやストレスをもち、自分や他人の尊い生命を軽視する行動が目立ってきている。今の子どもたちに、こうして自分の生命と共に、他人の生命の尊さを体験を通して実感させることは、何よりも大切にしなければならないことである。

生命の尊さは、教師の説話や読み物だけでは実感できるものではない。酪農教育ファームでは、人間が乳牛の貴重な血液を牛乳として毎日飲む。その乳牛と直接ふれ合うことにより、生命の尊さを体得できるのである。ここに、酪農教育ファームの重要な意義があると言える。

(3) 酪農家への共感

酪農教育ファームでは、酪農家の乳牛を世話する仕事への思いや願い、仕事に取り組む工夫や努力を直接見聞できる。このことは、食の仕事のもつ意味に気づかせ、食への関心を高める上で欠かせない。

はじめて、牧場を訪れる子どもたちの多くが発する第一声は、“臭い”“汚い”などである。しかし、みるみるうちに子どもの目つき、顔の表情が変わっていく。目の前の乳牛に“〇〇ちゃん”と名前をつけて呼びかけたり、牛の目を見て、“かわいい”を連発したりするようになる。

そして、その乳牛を飼育し、酪農の仕事に従事する人の仕事ぶりを見たり、説明を聞いたりすることにより、酪農家への共感をもつようになる。それは、言葉を持たない乳牛に“お早う”と声をかけたり、もの言わぬ乳牛の大きな体をさすったりする場面を見ることにより実感できる。

ある牧場で、「毎朝、4時に起きて、乳牛に“お早う”と声をかけ仕事を始めます。一日、2回、乳絞りをします。ここにいる牛は、みんな私の子どもです。乳の出る具合でその日の体調がわかります。いつも、この牛がおいしい牛乳を一杯出してくれるよう願っています。そして、お客さんから“おいしい”と言ってもらうのが、一番嬉しいです。」との牧場主の語りに感動して聞く子どもが多く見られた。

こうしたお話を聞くことにより、酪農家の仕事の工夫や努力の一端を知ることができ、その人の仕事にかけられる思いや願いを察知し、その人柄や生き方に共感できるようになる。

こうして、酪農家の仕事ぶりを見聞させ、子ども一人ひとりに正しい勤労観や職業観をもたせ、将来の自分の生き方に夢や希望を抱かせることは、今後、益々重要となる。酪農教育ファームでは、こうした教育がごく自然に可能となるのである。

(4) 総合的な学び方の体得

牧場や農場で、本物に触れる感動体験はごく自然のままに作文を書いたり、詩にしたりしようとする気持ちになる。また、周囲の風景に感動すれば即座にスケッチしたり、絵を描いてみたくなったりする。

こうして、感動体験は、子どもたちの活動を促す動機を一段と高めることになる。たまに広い草原で過ごせば、牧場にふさわしい歌を歌ったりしたくもなる。つまり、牧場で楽しく過ごすことは、自然に子どもの豊かな情操や表現力を高めることになり、ごく自然のままに国語や道徳、音楽、図画工作などの学習に発展していくことになる。

牧場や農場ばかりではない。その周囲を散歩したりすることにより、野草や草花、樹木や昆虫、野鳥なども直接に触れ合うことができ、理科や社会科、生活科などの教科の学習とも関連し、観察力や思考力、判

断力、表現力など、真の意味での「生きて働く学力」を高めていくことになる。

こうした学びは、特に、小学校段階には必要とされる総合的な学びである。物事を総合的に学んでこそ、その学びは、主体的になり、確かな理解へと定着する。こうして酪農教育ファームは、総合的な学びを無理なく身に付けることができるのである。

(5) 自然との共生の認識

今、地球的規模で環境問題が起こり、その解決が急がれている。

環境問題は、我が国においても大きな問題であり、学校教育でも、その積極的な働きかけが求められている。環境問題については、特定の教科学習の内容として学習するよりも、学校における教育活動全体を通して、日常的、計画的に実践されることが望まれる。

とりわけ、小・中学校の「総合的な学習の時間」においては、その実践が最適である。学習指導要領ではその課題内容の一例として、国際理解や情報、健康や福祉などととも、環境が取り上げられている。

繰り返し述べているように、酪農の仕事は、牛乳や乳製品などの生産の他に、動物の生命をはぐくみ、自然と共生するものである。酪農の規模としては、広々とした緑の牧場で行うものから、都市の郊外の牛舎で行うものまで実にさまざまである。

そうした牛舎では、毎日、大量に排せつされる糞尿をうまく処理し肥料として、自分の牧場の飼料用草地に還元したり、無農薬、有機栽培を進める他の農家などにも提供したりして野菜や果実、花などの栽培に役立っているケースが各地で多く見られるようになってきている。こうして、多くの酪農家は、周囲の環境の保全に留意して、自然との共生を図りながら仕事をしている。酪農教育ファームでは、こうした自然との共生を学べる場となり、教育的な意義をもつ。

さらに、酪農は、農地の保全、美しい農村景観の維持などにも重要な役割を果たしている。米の消費減少や生産過剰による水田の減反は、耕作放棄地の増加を生み出し、洪水や土砂崩れ、自然破壊や農村景観の荒廃を引き起こしている。こうした耕作放棄地を酪農家が借り入れ、飼料用採草地として利用し、守っているケースが増えている。

こうして、酪農は、農地の保全、美しい農村景観の維持等に大きく貢献している。この実態を直接見聞できるだけでも、酪農教育ファームの果たす役割は大きいものがある。

以上、ここでは、酪農教育ファームに期待される教

育的意義として、五つの要素を取り上げたが、これらの他にも、以下の二つが期待できる。その一つは、子どもたちの心の教育であり、もう一つは食育に関する教育の推進である。

本論では、冒頭、現在の学校教育が抱える課題として、子どもの健全育成にかかわる問題を論じた。酪農教育ファームは、子どもの健全育成の指導ともかかわって、子どもたちの心の教育に大きく貢献できる。

今更言うまでもないことではあるが、これまでの我が国の学校教育は、知識の量を増やすことに主眼がおかれてきたと言っても過言ではない。今、目の前の子どもたちの言動を見ても、極めて自己中心的な行動が多く見られ、他人に対する思いやりの心や他者の生命を大切にしようとする心が十分に育っていないと言えない実態が見られる。

また、最近の子どもたちを見ると、耐えることや困難に打ち勝つたくましさや粘り強さが極端に弱いことが指摘されている。冒頭に指摘した最近の子どもの問題行動は、こうした心や体の未成熟さが伴って起きている面がかなり多いようにも感じられる。今こそ、子どもの心や体の面を重視した教育の実践が望まれるときである。

こうしたときに、酪農教育ファームにおける実践は意義あるものとなる。第2次世界対戦の直後、アメリカにおいて、はじめて教育ファームが設立されたきっかけの一つには、荒れた子どもたちの心を動物とのふれ合いを通して癒すことにあった。

そこで、我が国においても、児童期にある子どもたちに、牛乳を通じて酪農家の仕事や牧場の自然にふれさせ、さらに子牛に与えるミルクという貴重なものの一部をいただいて生きていることを実感させることは大きな意味のあることである。

今の子どもたちは、自分一人だけでは生きていくことはできないということへの実感をもつ子が少ない。そのためにも、毎日、牛乳を飲むことを通して、動物や自然、そして、他者とのかわりのなかで自分は生きていることを具体的に考えさせる必要がある。

牛は、生きるために緑の牧草を毎日食べ、4つの胃袋で消化し、腸で吸収されながら、その栄養分を赤い血流に乗せて乳房に送り、やがて白いミルクへと変わらせていく。その白いミルクを人間が飲用し、自分の心や頭や体を成長させていく。こうした乳牛と自分とのかかわりを実感させることが大切なのである。

子どもたちが、かけがえない命の大切さを実感できるということは、このように「牛の命を頂く」ことにより生きていることを理解することである。酪農教

育ファームでは、このようにして子どもたちに命の大切さを体得させ、心や体の教育に寄与できる価値もっている。

ところで、近年、社会環境の変化により、子どもたちの食生活の乱れが深刻になってきている。また、食を大切にす心欠如や自然・伝統的食文化の喪失などが問題化し、「食育基本法」の制定が具体化されるようになった。⁹⁹

とりわけ、成長期にある子どもたちにとって、健全な食生活は、健康な心身をはぐくむためには欠かせないものである。こうした動きのなかで、我が国においては、2005（平成17）年度より、栄養教諭制度がスタートした。¹⁰⁰

この制度によれば、栄養教諭には、学校給食を生きた教材として活用し、実際に食べることを通じて指導することが求められている。牛乳や乳製品などは、学校給食においては、絶対に不可欠の食品であり、学校における食に関する指導を展開する際の重要な食品教材となる。

つまり、酪農教育ファームは、子どもたちが学校給食で日々飲用する牛乳のルーツとして位置づくことになり、酪農教育ファームでの学習が学校における食に関する指導を充実し、子どもに望ましい食習慣を身に付けさせることになる。

社会の変化や食生活の変化等により、偏食傾向にある子ども、肥満傾向や瘦身願望の強い子どもなどが益々増加していく傾向も見られる。こうした状況を踏まえて、学校は栄養教諭を中心に家庭との連携を一層深めながら食に関する指導に真剣に取り組まなければならない。学校における食に関する指導を充実する上でも、今後、酪農教育ファームは一層期待されるものとなる。

IV 酪農教育ファームのカリキュラム開発

(1) 小学校の教育課程と酪農教育ファーム

小学校の教育課程は、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の四つの領域から構成されている。学校の教育活動とは、各学校が創意工夫を生かして編成した教育課程を実施することを意味する。

つまり、各学校が酪農教育ファームでの学習を効果的に展開していくためには、地域や学校の特色、子どもの特性等を生かして、自校として特色のあるカリキュラムづくりを工夫しなければならない。酪農教育ファームでの学習は、上述した四つの領域のうち、どの領域の学習においても実践が可能である。

その際、どの学年の、どの時期に、どの単元の学習として、どの程度の時間をかけて実践するのかなど、酪農教育ファームでの学習にかかわる全体的な計画の作成が必要となる。例えば、教科学習の一環として実践する際には、何よりも学習指導要領との関連を考慮しなければならない。

小学校における教科学習として、酪農に関する学習内容は、社会科に限定されている。例えば、現行小学校学習指導要領・社会では、第5学年の内容として以下の記述がある。¹⁰¹

第5学年内容

(1) 我が国の農業や水産業について、次のことを調査したり地図や地球儀、資料などを活用したりして調べ、それらは国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかわりをもつて営まれていることを考えるようにする。

ア 様々な食料生産が国民の食生活を支えていること、食料の中には外国から輸入しているものがあること。

イ 我が国の主な食料生産物の分布や土地利用の特色など。

ウ 食料生産に従事している人々の工夫や努力生産地と消費地を結ぶ運輸の働き。

内容の取扱い

(1) 内容の1のウについては、農業や水産業の盛んな地域の具体的事例を通して調べることとし稲作のほか、野菜、果物、畜産物、水産物などの生産の中から一つを取り上げるものとする。

つまり、第5学年の社会科では、稲作のほか、野菜果物、畜産物、水産物などの生産物の中から一つを取り上げて学習するようになっている。そこで、全国の子どもたちが使用する教科書には、畜産物についての記述は若干見られるものの、畜産物についての学習は選択となっており、各学校の裁量に任されている。そのため、畜産、酪農については、全く学習しないケースも考えられる。

このように学習指導要領・社会では、畜産（酪農）についての内容は、第5学年のみである。しかし、第3、4学年の「地域の人々の生産や販売に見られる仕事の特色」として、畜産（酪農）の仕事が身近に見られる学校にあっては、第3、4学年の社会科で、農家の仕事として、畜産（酪農）を取り上げて学習することが可能である。今後、こうした地域にある学校では

中学年の地域学習として、積極的に畜産（酪農）を教材化し、その実践に取り組むことを勧めたい。

ところで、乳牛などの大型哺乳動物の取り扱いについては、小学校の教科学習の内容としては取り上げられていない。理科では、身近な小動物として、第4学年で身近な動物の活動と季節とのかかわりを、生活科では第1、2学年の内容として、動物を飼ったりしてその育つ場所や変化、成長などについて学ぶようになっている。⁹³

こうしてみると、現在の小学校においては、教科学習の内容としては、酪農及び乳牛などの大型哺乳動物の扱いについては、極めて薄いとも言える。そこで、酪農教育ファームでの体験学習は、教科学習というよりもむしろ「総合的な学習の時間」での実践が期待されることになる。

総合的な学習の時間は、子どもの生きる力をはぐくみ、特色ある教育活動の実践の場として創設されたものである。それは、教科書を唯一の教材として教えてきた我が国の学校教育の在り方を根本から見直すものとして新設されたものであり、極めて意義のある教育活動である。

つまり、この時間は、地域や学校、児童の実態等にに応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習などを創意工夫しながら授業として実践するものであり、各学校の主体的な取組が期待できる時間である。そのため、この時間の授業内容として、酪農教育ファームでの学習は最適である。総合的な学習の時間に酪農教育ファームでの学習を組み入れ、特色ある実践が国内各地でも見られるようになってきており、そのカリキュラム開発が、各地で活発に行われていることは喜ばしいことである。⁹⁴

(2) 総合的な学習の時間でのカリキュラム

酪農教育ファームでの学習を総合的な学習の時間において実践するに当たっては、その活動タイプに即したカリキュラム開発が必要となる。その際、以下の五つの型の実践プランが考えられる。

① 地域密着型のカリキュラム

このタイプは、牧場や農場が学校から比較的近距離にあって、地域学習の一環として地域とのかかわりを十分に生かしながら活動するものである。

牧場や農場への行き滞りの時間的な制約も少なく、輸送や引率の問題も心配がなく、年間を通じて、継続的に、牧場訪問が可能である。地域に根ざした教育活動の推進が叫ばれている昨今、身近にある牧場や農場「もう一つの教室」として、乳牛などとのふれ合いを重

視した活動をカリキュラム化することは、酪農教育ファームでの学習をより効果あるものとする。

こうした地域密着型の酪農教育ファームでの学習は子ども一人ひとりに、地域の一員としての自覚をもたせると共に、地域への愛着を深め、地域をよりよくしていこうとする意欲を高めることになる。

今、農漁村においても、若い世代を中心として、いわゆる「地域離れ」の現象が多く見られるようになってきている。そこで、これからの学校教育は、自分たちの地域の中から価値ある教材を開発したり、多様な教育活動を展開したりして、もっと地域のよさを見出すことに努めなければならない。そのためにも、酪農教育ファームは、そのよき素材となる。

② 都市近郊型カリキュラム

このタイプは、牧場が都市の近郊に位置し、バスや電車などの乗り物を利用して、半日ないしは1日をかけて酪農体験をするものである。

地域密着型とは異なり、交通機関を利用するという制約はあるが、自然に恵まれず、牛などの生き物とのふれ合う機会の少ない都会の子どもたちには、乳牛とふれ合う体験を通して、生き物への愛着、生命の大切さなどを体得できる。また、バターづくりやアイスクリームづくりの体験を通して、本物を学ぶ楽しさなどを味わうことができる。

このタイプの実践に際しては、無理なく計画的に活動できるカリキュラム開発が必要となる。ややもするとあれもこれもと欲張りがちな活動を組み入れがちとなるが、中心となるものを絞り込み、重点化した活動内容とする工夫が大切である。交通費等の予算的な措置にも十分配慮するようにする。

③ 職場体験型カリキュラム

今、小・中・高等学校を通じて、「キャリア教育」の推進が求められている。

キャリア教育とは、子どもたちに職業の意義や勤労の尊さを理解させ、健全な職業観、勤労観を確立するとともに、将来の職業や進路の適切な選択と職業生活等への適応、つまり職業人としての資質・能力の基礎を身に付けさせようとする教育である。昨今、ニートやフリーターなどの増加が問題視されている中で、キャリア教育は今後一層重要となる。

こうしたキャリア教育の一環として、最近では小・中・高等学校で、職場体験を教育活動に取り入れている学校が増えている。その際、酪農教育ファームでの体験学習は価値あるものとなる。

酪農教育ファームでは、酪農家の人たちの仕事の工夫や努力の様子を見聞したり、牛舎の清掃、牛のブラ

ッシング、搾乳、子牛への哺乳、バターづくりなどの体験活動をする。酪農家の人たちとのインタビューや酪農体験を通して、職業の意義や勤労の尊さを理解できるようになり、職業人としての資質・能力の基礎を身に付けられるようになる。とりわけ、中・高等学校の実践としては、意義あるものとなる。

④ 移動教室、修学旅行型カリキュラム

このタイプは、宿泊を通して実施するものであり、あまり回数多く実施できるものではない。

これまでの移動教室、修学旅行は、ややもすると教師主導で進められてきた経緯がある。しかし、これからは、子どもたちの思いや願いを重視し、日程の中の1日程度を宿泊地の近くにある牧場や農場に出向き、そこを学びの場として酪農体験や農業体験を取り入れてみるような工夫も望まれる。

こうした取り組みは、今後、一層重視されるものとなる。特に、酪農が盛んな北海道や九州などにおいては無理なく実施できるものであり、その地域の土地柄や地域性をとらえるためにも効果あるものとなる。こうした活動を盛り上げるためにも、ねらいに即したカリキュラム開発が急がれる。

⑤ 移動型カリキュラム

このタイプは、酪農家が幼稚園や保育園、学校などに乳牛や小動物を移動させ、子どもたちに居ながらにして酪農体験をさせようとするものである。つまり、「学校に牛が来る」という授業である。

現在、酪農教育ファーム推進委員会等が中心となり上述した趣旨を生かし、酪農家の協力を得ながら「わくわくモーモースクール」を実施し、多くの成果をあげている。こうした授業を組むことにより、子どもたちは搾乳やブラッシング、子牛の哺乳などを体験し、牛の体のぬくもりや乳首から出てくる生乳の温かさを実感できる。また、子牛が夢中で乳を飲む姿や子牛のかわいさにもふれることができる。こうしたふれ合い体験から、子どもたちは感動を味わい、豊かな感性を磨き、学ぶ意欲を高めていくことになる。

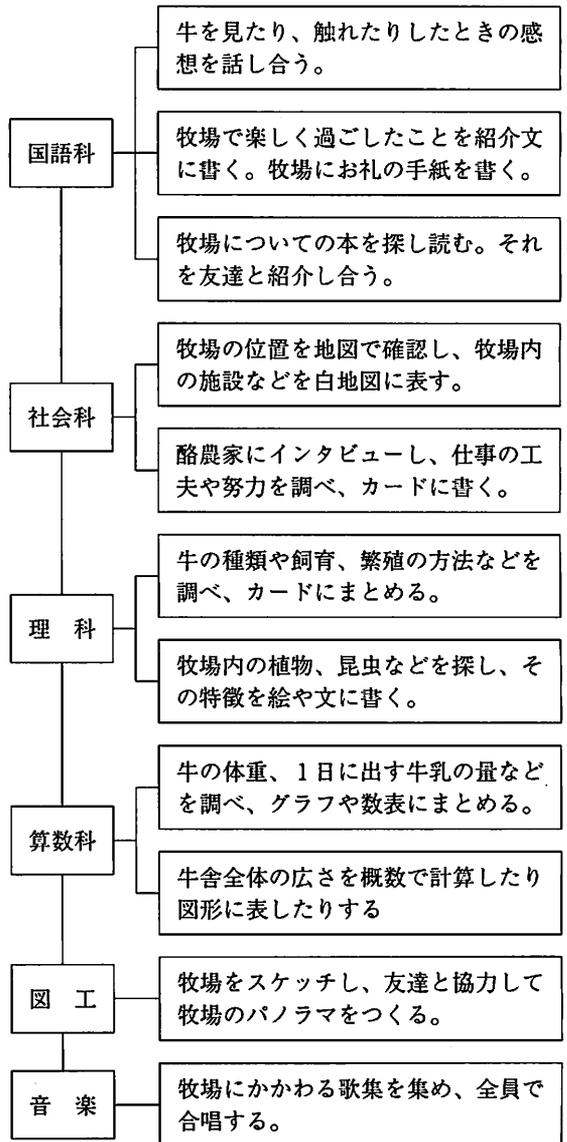
こうして乳牛を学校などに招いて、子どもたちに酪農体験を味わわせるという移動型カリキュラムの開発に当たっては、事前に酪農家との連携を密にし、酪農家にとっても、学校にとっても共に意義ある活動が展開できるように留意しなければならない。また、学校としての方針や目標、実施学年、活動内容などを明確にし、計画的に実施できるようにすると共に、保護者や地域の人々の理解と協力が得られるように配慮することも重視しなくてはならない。

(3) 教科学習としてのカリキュラム開発

酪農教育ファームでの学習は、総合的な学習の時間だけでなく、教科学習の一環としても価値ある実践が可能となる。

教科学習としては、「単一の教科学習」としてのタイプと「教科関連の学習」としてのタイプが考えられる。これからの子どもの学びとしては、小学校においては各教科の関連を図った関連学習が重視される。そこで、ここでは特に小学校中学年の教科関連の学習としての構想を提示したい。

【小学校中学年の各教科関連学習の一例】



V おわりに

本論では、主として我が国における「酪農教育ファーム」の成立とその教育的意義について論述した。

我が国における酪農教育ファームは、成立して間もなく、まだ国民全体に十分周知されているとは言えない実態にある。しかし、その基礎づくりの段階は終了し、充実・発展を目指す段階を迎えようとしていることは事実である。

年々、各地で、特色ある実践が多く見られるようになり、その成果が確認されてきていることは喜ばしいことである。酪農教育ファームは、教育と酪農、農業との一体化を目指すものであり、それは生き物など、本物とのふれ合いを通して、子どもたちの食と命と心をはくむことをねらいとする活動である。

こうした活動は、ヨーロッパ各地、特にフランスを中心として活性化している。例えば、フランス国内には、現在、1400の教育ファームが活動している。その約60%は農家が営む教育ファームが占めているが、行政や非営利団体等が運営する教育ファームも充実してきている。こうしたファームが、近年では社会福祉事業にも活用されるなど、活動の多様化が見られるようになってきている。

今後の我が国の酪農教育ファームは、フランスやイギリスなど、広く海外の教育ファームの動向にも注目し、そのよさを参考としながらも我が国の実態に即した「我が国流」の教育ファームの充実・発展を目指すことが大きな課題である。

ところで、現在の我が国の学校教育、また、我が国の農業、酪農産業においても、大きな課題を抱えている。特に、教育の面においては、現在、教育改革の真っ只中にあり、次期教育課程の改訂が急ピッチで進められている。時代の変化に応じて、改革は絶対に必要なことである。しかし、如何に改革が進もうとも、教育は子ども一人ひとりの人格の完成を目指して行われるものであり、子どもの全人的な発達を促すものであることは変えてはならない。こうした教育のもつ「不易」の面を重視し、子どもたちに毎日飲む牛乳のルーツである牧場を訪問し、牛をはじめ昆虫や草花など、本物とふれ合う体験を通して、子どもたちに食や命、心をはくむ教育を行うことは、今後も大切にされなければならない。こうして本物を通じて学ぶ楽しさ、活動にのめり込む集中力、追究力、持続力などを身に付けることが、学ぶ意欲を高め「確かな学力」を定着していく基盤となることを忘れてはならない。

(注)

- (1) 2005（平成17）年9月23日、朝日新聞朝刊社会面 小学生の校内暴力の件数の推移（文科省まとめ）の記事を掲載
- (2) 平成16年度児童生徒課関係資料 文科省平成16年
- (3) 学校心理学ハンドブック「学校の力」の発見—教育出版 平成16年 P44～45
- (4) 酪農体験学習ハンドブック
(社)中央酪農会議 平成16年 P11
- (5) 酪農教育ファーム推進委員会資料
(社)中央酪農会議 平成12年
- (6) 酪農体験学習ハンドブック
(社)中央酪農会議 平成16年 P12
- (7) 酪農教育ファーム認証規定
(社)中央酪農会議 平成13年
- (8) 酪農体験学習
(社)中央酪農会議 平成16年 P18～20
- (9) 拙稿「畜産コンサルタント」NO439号 2001年 平成13年7月 P17～20
- (10) 2000年制定された食生活指針を具現化するため、食育基本法が制定された。ここでは、健康で文化的な国民の生活、豊かで活力ある社会の実現を目指している。食育推進会議会長は内閣総理大臣。
- (11) 第159回通常国会で関係法律成立 平成16年5月 教育職員免許法改正 平成16年7月 平成17年4月1日施行
- (12) 小学校学習指導要領社会編 平成10年度版
- (13) 小学校学習指導要領理科編 平成10年度版
- (14) 酪農教育ファーム推進委員会では、平成13年度より特色ある実践事例を国内各地より収集し、「酪農体験学習実践事例集」としてまとめ、発刊している。